

産業観光資源

印刷・製本の街

最大の地場産業、つねに情報発信

明治元年に築地明石町に外国人居留地が設けられ、文明開化の波が築地、銀座へと広がっていきました。6年には築地に活版製造所がつくられ、近代印刷のメッカとなりました。

これを機に、入船、湊、築地地区に出版社や印刷会社、製本会社が数多く集積しました。今日、中央区の地場産業が印刷・製本業といわれる基盤は、この頃にでき上がったのです。とくにお隣の銀座地区に新聞社が続々と集まり、明治初頭に情報発信基地を形成していたことと無縁ではありません。

現在でも、新川、八丁堀など周辺部を合わせた一帯に、区内業者の大半が集まっています。また、江戸文化の発信地であった日本橋地区にも、印刷会社が数多く営業しており、地元の産業(商店、流通業)の隆盛を支えています。

現在、築地に「活字発祥の碑」が残っていることから解かるように、中央区は日本における印刷発祥の地です。この地区にはいまなお印刷会社が数多く存続し、情報化社会の一翼を担っています。

ミズノプリンティングミュージアム =

裏面参照

DICカラースクエア=裏面参照



食料品の街

食品加工から「もんじゃ焼」へ

月島の工業地帯は、機械製造・金属加工をおこなう工場を中心に形成されていましたが、戦後になって海産物加工などさまざまな食品加工産業が加わってきました。隅田川を挟んで、西の印刷業、東の食品加工業が中央区工業の双壁といわれた時代もあったほどです。

清澄通りより西側地区(隅田川寄り)には、戦前から工場労働者のための食料品店、日用品店などが集まっていたのですが、月島自体が震災から免れた関係から、戦後いち早く復興することができました。このことが幸いして「下町情緒溢れる歴史ある街」へと発展してきたのです。現在の月島は、再開発により建物の高層化が進み、地元の消費者が増えたこともあって、新たな賑わいを見せています。

月島名物のもんじゃ焼は象徴的な存在となっています。もんじゃ焼そのものは、古くからあったのですが、平成9年に28店舗が集まって「もんじゃ振興会」を結成(現在、もんじゃ振興会協同組合67店舗)し、地域の振興と各店舗の発展のために活動しています。



海運の街

倉庫が立ち並ぶ流通ターミナル

豊海、勝どき、晴海辺りは、以前は工場中心の町でしたが、埋め立て地の整備・再開発、陸上および海上の交通路の整備とともに、大規模な流通倉庫が点在するようになりました。

豊海は、漁業基地建設のために昭和30年代に埋め立てられた土地で、港湾設備はもちろん、魚類冷凍・冷蔵倉庫が建ち並んでいます。また晴海は、第2次世界大戦中、軍需物資の輸送基地として仮倉庫があったところで、終戦後に埠頭として利用されるようになったのです。

豊州、晴海の大港湾地域は、大企業の進出により、月島を加えた新しい産業エリアをかたちづいています。先端の晴海埠頭は東京湾の客船ターミナルとして、中央区の海の玄関となり、華を添えています。

船から陸へ、陸から船へ荷物の海運・流通の役割を果たす日本有数の地区となった、この辺一帯は埠頭に横付けされる船舶、荷卸し・荷運びのために倉庫にやってくるトラックで、日夜活気に満ちています。



第13回 中央区産業文化展

サテライト会場

今回の「産業観光」というテーマに沿って中央区産業文化展にご協力をいただいた各施設です。中面の地図に表示しておりますので、ぜひ訪れてみてください。

貨幣博物館(日本銀行金融研究所)

古代から現代まで各時代の鑄造技術、印刷技術によってつくられた貨幣と紙幣、海外の珍しい貨幣や紙幣を展示していますので、お金を通じて歴史や社会との関わりを学ぶことができます。11月1日発行の新紙幣をテーマとした企画展もおこなっています。

- ・所在地=日本橋本石町1-3-1、日本銀行分館
- ・開館時間=9時30分~16時30分(入館16時まで)
- ・休館日=月曜日、祝日、年末年始
- ・入場料=無料
- ・問い合わせ先=電話03-3277-3037
- ・最寄り駅=東京メトロ「三越前」、JR「東京」



小津和紙博物館

全国でつくられる手漉き和紙はもちろん、葉書、便箋、OA用紙といった和紙小物に関する貴重な製品サンプル、和紙の歴史に関する資料などを展示しています。また、実際に墨彩絵や押し花などが体験できる教室、和紙文化を知るギャラリーも開いています。

- ・所在地=日本橋本町2-6-3 (平成17年1月に本町3-6-2へ移転)
- ・開館時間=10時~18時(移転後は19時まで)
- ・休館日=日曜日
- ・入場料=無料
- ・問い合わせ先=電話03-3662-1184
- ・最寄り駅=東京メトロ「三越前」、JR「新日本橋」



ミズノプリンティングミュージアム

バビルス文書や世界最古の印刷物である百万塔陀羅尼經、世界三大美書といわれる昔の書籍から、瓦版、版木、版画、初期の鉄製印刷機まで、印刷に関わる由緒ある文化財を常設展示しています。現代の印刷技術と結び付けて、印刷の歴史と文化を語ります。

- ・所在地=入船2-9-2、ミズノブリック(株)内
- ・開館時間=10時~17時
- ・休館日=土・日曜日、祝祭日
- ・入場料=無料(ただし、訪館の際は事前連絡が必要)
- ・問い合わせ先=電話03-3551-7595
- ・最寄り駅=東京メトロ「新富町」、「八丁堀」



フィルムセンター(東京国立近代美術館)

日本唯一の国立映画機関として映画フィルムや資料の収集など様々な事業を行っている「映画の博物館」といえるところです。バラエティーに富んだテーマごとの上映や、映画機材など資料の展示をみることで(有料)、図書室で文献の閲覧もできます(無料)。

- ・所在地=京橋3-7-6
- ・開館時間=11時~(閉館は曜日や施設により異なります)
- ・休館日=月曜、日曜(図書室のみ)、年末年始、準備期間
- ・入場料=上映・展示内容により異なります。
- ・問い合わせ先=電話03-5777-8600
- ・最寄り駅=東京メトロ「京橋」、都営地下鉄「宝町」



DICカラースクエア

第13回・中央区産業文化展のサテライト会場として、会期中「色と印刷」をテーマとする特別展「Printing Gallery」を開催しましたが、通常は、色彩やデザインを機軸に置いたさまざまな企画展をおこなっています。

- ・所在地=日本橋3-7-20、ディックビル1階
- ・問い合わせ先=ディックカラー&デザイン(株) 電話03-3279-0409
- ・最寄り駅=東京メトロ「日本橋」、JR「東京」

問い合わせ先
中央区役所商工課(中央区築地1-1-1 電話03-3546-5328)



2004.10



中央区

産業エリア マップ



第13回 中央区産業文化展 関連資料

= 発行 =

中央区

中央区産業文化展実行委員会

わたしたちの

繊維問屋の街

江戸初期の頃から日本のルーツ

中央区の北部一帯は、繊維や衣料、身回り品を扱う問屋街、商店街として、江戸初期の頃からずっと繁栄してきました。富沢町の古着市は江戸時代の名物だったのです。当時、この辺は旅籠屋の町として知られ、投宿した全国各地の商人たちに商品を売るために、さまざまな問屋が集まってきたのが起こりです。

現在、横山町・馬喰町一帯には服飾や小間物類、また堀留町・富沢町一帯には繊維や和装を扱う卸商社、店舗が軒を並べています。問屋街のルーツとして発展を続け、いまでも全国一の規模を誇ります。ファッションや流行の発信基地にもなっています。

この地域には、他にも鉄鋼、金物、酒、砂糖、陶磁器などさまざまな品目を扱う問屋が集積し、なかでも堀留町は、明治時代に「財閥の町」といわれた歴史を誇ります。大伝馬町も問屋街の色彩が強く、金物問屋が多く存在しています。お隣の小舟町も江戸湊の一画にあって、舟からの荷揚げが盛んにおこなわれていた関係で、海産物、量表、綿糸などの問屋が軒を並べていました。

ボタンの博物館=日本橋浜町1-11-8

電話03-3864-

6537



日本橋商業の街

江戸商業の中心、伝統引き継いで

江戸時代の五街道の起点であった日本橋および日本橋室町界隈は、徳川家康が江戸城に来てすぐに区画整理をおこなったところで、江戸商業の発祥の地といえます。道沿いには時代とともに、金融業者や大商人が大勢、お店を張るようになったのです。

例えば、「にんべん」(鯉節問屋)「長崎屋」(江戸参府のオランダ人専用宿)「三井越後屋」(呉服店)などです。なかでも、三井は江戸元禄時代に「現銀掛け値なし」を掲げてここで開業し、大儲けしました。これを発端に、戦前には「三井村」と称される旧三井財閥の本拠地となっていました。

こうした歴史を踏まえて、伝統ある老舗や三越、高島屋など有名百貨店が並び、活気に満ちた商業の街となっています。東隣の日本橋本町は、戦後、いち早くビルラッシュが起こり、この辺一帯の商業を支える力となってきましたが、いままた、日本橋地区の再開発が急ピッチで進められ、新しい姿に生まれ変わろうとしています。



金融の街

銀行独占、資本主義の基盤つくる

明治の初めの頃、銀座が商業の街に生まれ変わろうとしていたのと並行し、日本橋周辺では資本主義経済の基盤づくりが着々と進展していました。

明治6年、当時の財界リーダー、渋沢栄一の呼びかけによって日本橋兜町に第一国立銀行が誕生したのが、わが国における銀行の先駆けです。後の第一銀行、現在のみずほ銀行の前身に当たります。

日本橋本石町には江戸時代に金座が置かれ、その後、明治29年には日本銀行(明治15年開業)が移転してきました。この辺は、かつて本両替町といわれていたほど、江戸時代以降の、わが国における金融の総本山として自他共に認める存在となっています。

ちなみに、明治13年当時、東京市内には三井 安田をはじめ24の銀行がありましたが、そのうち20行が日本橋に、4行が京橋にあったそうです。中央区にすべての銀行が置かれるという「一人舞台」だったわけで、隆盛ぶりが偲ばれます。

貨幣博物館=裏面参照



元気な商工業 地域を支えて 生活と仕事を 生き活きと!!

八重洲商業の街

中央区の表玄関として急発展

八重洲一帯は昭和初期に、東京駅の八重洲口がつけられたことをきっかけに、再開発が始まりました。江戸の初期、東京湾と外堀を結んでいた紅葉川(八重洲通り)は、すでに江戸時代中頃に埋め立てられていましたが、外堀の埋め立てが始まったのは、戦後になってからでした。この辺り一帯が中央区の陸の玄関として脚光を浴びるようになったのは、大丸百貨店が開店した頃からです。

駅前の交通渋滞を解消する目的で、公共地下駐車場と公共地下道を建設することとなり、それに合わせて地下商店街の建設が計画されました。その結果、昭和40年に八重洲通り地下街、ついで44年には外堀通り地下街が完成しました。

区内有数のビジネス街となっている日本橋中央通りと繋がったこともあって、さまざまな人たちが行き交う一大エリアとなりました。日本の中心、東京駅をバックヤードに控えている関係から、この辺りは商店、企業、銀行・証券、飲食店などが渾然一体となった総合地域として、中央区の繁栄を象徴しています。

フィルムセンター = 裏面参照



証券の街

日本のウォール街、経済の要

日本橋兜町は江戸時代、武家屋敷が軒を構えていたところですが、その後、明治11年に東京株式取引所が開設され、それ以来、ここは「証券の町」として全国に知られるようになりました。長い間、証券業者が周囲に集まった「シマ」と呼ばれる特殊な地帯を形成していました。

第2次世界大戦後、東京株式取引所が現在ののかたちの東京証券取引所となり、川を隔てて北側に隣接する日本橋小網町、東隣の日本橋茅場町にも、証券会社が集り、その付近一帯は、「日本のウォール街」と呼ばれるようになったのです。そして現在、茅場町には東京証券会館が建っています。

こうして、この辺り一帯はわが国経済にとって、もっとも重要なバロメーター役を担うようになりました。グローバル経済を左右する三極の一つとして、ニューヨーク、ロンドンと並んで、世界中の注目の的となっています。

証券情報室 = 日本橋茅場町1-5-8

電話03-3667-2754



紙の街

江戸の出版文化を育て

江戸時代に版元や貸し本屋が数多かった日本橋地区には、その歴史を受け継いだかたちで、いまでも和紙や特殊紙を扱うお店が少なくありません。

元禄時代、すでに大規模な商業地帯となっていた日本橋や京橋で、浮世絵、錦絵、小説本などをつくる出版業が生まれています。これらを販売するお店(書店)も当然多かったと思われます。

このことが明治以降、印刷・製本業を中央区の地場産業に育てる基盤となったわけですが、印刷物をつくるときに必要な紙を扱う業者が付随して集まるのは、昔も今も変わりはありません。印刷の発祥の地とされる築地方面にも、印刷・製本会社と同様、印刷用紙を扱う会社が進出していきました。入船、湊、新川地区の各所でたくさんの紙の卸売り、小売り会社をみることができます。

印刷と紙は車の両輪のような関係にあり、二つの業種は区内の至るところに万遍なく存在しているというのが、現実の姿なのです。

小津和紙博物館 = 裏面参照



中央区産業分布図

酒問屋の街

道修町(大阪)と東西の「横綱」格

日本橋本町には薬業問屋や製薬会社が集中しています。大阪では道修町(中央区)が薬の街として知られていますが、この地もそれと並ぶほど有名です。日本橋は地方と結ぶ五街道の要にあり、人々が全国から商いにやってきました。そのため薬の材料と調合技術を集約しやすい環境が、この地で製薬業を栄えさせた



酒問屋の街

将軍にも大好評だった「下り酒」

江戸湊に面する新川や茅場町は、早くから海運業に縁の深かった土地で、上方(関西)の材木商や酒問屋が堀割の両岸にお店を並べていました。とくに灘地方から船で運ばれてきた清酒は「下り酒」として人気を呼んだのです。そんな歴史を背景に、新川地区にはいまでも酒問屋



銀座商業の街

世界に冠たるショッピングストリート

江戸時代には銀貨をつくる鑄造所が置かれた街だった銀座は、明治になって煉瓦造りの街並、ガス灯、街路樹、乗り合い馬車と文明開化の先陣を切る繁華街へと一気に移り変わりました。

現在、世界の一流品専門店や老舗の名店が軒を並べる銀座は、洗練された大人の感覚をもつ世界に名だたるショッピングストリートです。中央通りを挟んで、流行の先端をいくお洒落な高級ブティックやカフェ、松屋、三越、松坂屋といった一流百貨店が建ち並んでいます。

銀座の並木通りと中央通りには、世界に冠たるブランドショップが点在し、流行をリードするブランド通りとも称されます。

週末には歩行者天国も実施され、若者たちや家族連れで賑わいます。また、あちらこちらにあるギャラリーが、文化の彩りを添えています。

お米ギャラリー = 銀座7-9-15

電話03-3289-

7300



築地魚と青果の町

都民の台所を一手に引き受ける

この魚市場は最初、船からの陸揚げに便利な日本橋の袂にあったのですが、関東大震災を機に移転することとなり、昭和10年に築地にやってきたのです。

京橋の青物市場も一緒に移され、水産と青果など生鮮食品を総合的に扱う中央卸売市場として、東洋一の規模と設備を誇るまでになりました。場内には1,000軒に及ぶ仲卸のお店が並び、水産物の取扱量は、わが国最大となっています。

市場に隣接した場外市場(築地交差点付近)では、海産物、総合食品、日常雑貨を扱う卸問屋が400店以上も営業し、来場者はもちろん、一般の人でも買い物や食事を楽しむことができます。

東京で一番早起きし、活気と威勢の良さが都民の台所を一手に引き受けている、ここ築地は江戸っ子の心意気がいまなお残っているところです。

おさかな普及センター資料館 =

築地6-20-5、電話03-3547-

8824



機械・金属の街

明治以降の近代化、高度成長を担う

佃にかつて石川島造船所があった関係で、近隣に金属加工の工場がたくさん集まりました。明治36年、お隣の月島に相生橋が開通してから、この一帯は、殖産興国という当時の国策に沿った工業地帯として急激な発展を遂げました。

石川島造船所の下請けとして小さな工場が多く、ボルト、ナット、ネジ、リベットなどを加工していましたが、日清戦争以降、戦争が勃発するたびに軍需産業が活気づき、空前の好況を呈しました。戦災から免れたこともあって、戦後の経済復興期と高度経済成長期には、京浜工業ベルトの一端を担い、さらに躍進しました。

しかし最近では、造船所をはじめ工場の相継ぐ郊外移転などで、住宅や商店に替わってきています。今なお残る少数の鉄工場が、明治以降の近代日本の発展を担った面影をとどめています。

石川島資料館 = 佃1-11-8

電話03-5548-

2571



* 中央区の工業についての情報は.....中央区工業団体連合会(URL:http://www.chuo-kogyo.jp)へ